

南アジアの地域保健

ー現代インドの医療保健:経済発展と社会開発ー

平成 21 年入学

カメルーンフィールドスクール参加

調査地:南アジア(今夏はインド・ネパール)

江岸 伸

キーワード:医療保健, 南アジア, 多様性, 持続性, 経済発展

自分の研究テーマについて

医療・健康の問題について、南アジア地域、特にインドに注目して、研究を進めている。疾病による身体の機能不全は、働き手の喪失や世代の再生産の危機、家族・共同体の弱体化などを引き起こし、住民の健康の確保は生存基盤の持続性に不可欠な要素といえる。2008 年のG8サミットでも、個人の疾病対策と並んで、国・援助機関が効果的に保健システムを強化する方法を必ずしも持ち合わせていない事実が指摘されている。

その点で、南アジアは西歐的近代化の尺度で測ればおそらく世界の中でも開発下位グループ群に属するが、一方で人種・宗教など多様性を内包しながら独自の発展を模索してきた地域でもある。そこに見られる知見は、先進国も含めて、これからの保健政策を考える上で参考となるような事例も少なくない。

特にインドは、近年著しい経済発展を遂げようとしており、今後、社会開発の面でも過渡期を迎えるものと思われる。広大な国土の下で、人種・宗教、混然とした多様性を抱えながら、インド社会がどのような地域保健を実現しようとしていくのか。彼らの発展の行方に注目することは、日本や世界の保健政策にとって、社会の質的發展を目指す上で学ぶべき点は多いと考えている。

フィールドスクールから得られた知見について

私が感じた本プログラムの魅力の一つに、視野を広くもって考える機会が得られた点が挙げられる。おそらく普通の学生生活では、研究の関心がおのずと自専攻の内にとどまったり、文献購読も関連する特定分野に偏りがちである。しかしフィールドスクールでは、各専攻から学生が集まりそれぞれの研究背景をもって同じ空間・時間を共有することが可能である。たとえば、私とホテルで同室だった先輩研究者の方は、すでにカメルーンで半年間調査を行っている方だったが、そこで森に住む人々の生業や生活様式、森の生活に適応するために人々がどのように暮らしてきたかなど、分かりやすく興味深く教えてくださった。そして翌日には、フィールド演習として東部州のジャー森林保護区に赴き、実際に森の民ピグミー族に会いに行くことができたのだが、このような一連の知的経験ができるのもフィールドスクールならではの特徴であろう。このように横断的に異なる知識を交流することで、自分の従前の興味から少し外れて、自然と物事を捉える視野を広げることができたと感じた。

実際の開発実務の現場も、複合的な要因が絡み合って問題が顕在化していることも少なくない。今回の経験をきっかけとして、そのような場面で必要な、事象を分析するための多面的な視点というものを今後も意識して身につけていきたいと思った。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか

本フィールド・スクールの参加を振り返って強く印象に残るのは、「現地の力強さ」であったと思う。熱帯の気候の強烈さ、人々の明るさ・前向きさといっても良いが、とにかくここで得られた具体的経験は、間違いなくこれから

の私の研究にプラスになると感じた。

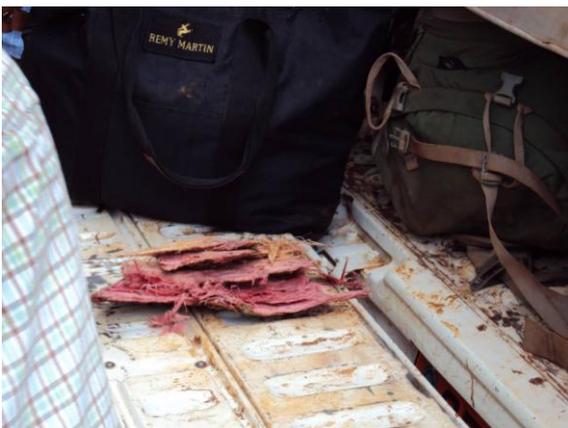
開発の勉強をしていると、ともすれば理論やマクロな数字の分析が先行して、地域との協働を見失いがちになる。しかし本来、地域の発展の主役はそこに住む人々であり、彼らの目線に立ってどのような社会が望ましいのか、それを考える手助けをするのが地域研究の役割である。その意味で、Andom 村の女性たちの村を良くしようという熱烈さや、若き首長の前向きなスピーチは、私に研究の意義を再認識させてくれた。頭では分かっているが、これは行って見て感じなくては分からない。本プログラムでの経験を刺激として、自らの研究テーマである医療保健についても、真に地域に貢献できる研究を進めたい。



【ヤウンデ市内:道路沿いの商業広告】



【Dja 川:手動の渡しいかだ】



【木の皮の天然の湿布:長距離を運転するドライバーのために】



【Andom 村:村の女性たちによる熱烈な歓迎】